

健康情報発信に関するメディア側の認識調査の進捗状況

1 これまでの経緯

これまでの「健康食品」専門委員会において、メディアの発信する健康情報が、消費者に大きな影響を与えているとの指摘があり、メディアから発信される情報の科学的な正確性などについて、把握するための調査が必要とされた。

そこで、具体的なテレビ番組について、情報作成プロセス等を確認することとなった。

2 インタビュー調査

調査対象者	番組の当該放送日の担当プロデューサー又はディレクター
調査方法	インタビュー用紙をもとに対面して質問。先方の都合により、面会できない場合にはインタビュー用紙を配付し、後日回収。
調査結果	現在、調査中

3 インタビュー対象番組の選定

平成 17 年 3 月 26 日から平成 17 年 5 月 15 日まで、番組表、放送局ホームページ等から食品に関する健康情報を発信していると思われる番組を取得し、計 16 番組を視聴。その中から食品に関する健康情報が発信され、かつ高視聴率安定の番組を選定。ただし、高視聴率安定でなくても、各放送局につき最低 1 番組は対象とした。

高視聴率安定：平成 17 年 2 月 7 日～平成 17 年 3 月 13 日の間の平均視聴率が 5%以上
(参照：(株)ビデオリサーチ「テレビ視聴率速報 Vol.11 '05 3/7～3/13」)

4 【参考】メディア情報に対する既存調査等について

(1) 第 57 回日本栄養・食糧学会抄録(2003 年)

「テレビの『健康情報娯楽番組』が取り上げる食の情報フードファディズム(Food Faddism)」

(2) 第 58 回日本栄養・食糧学会抄録(2004 年)

「テレビの『健康情報番組』の視聴と食品の利用行動」

高橋久仁子(群馬大学教育学部)、深町亜矢子(群馬大学教育学部)

(3) 第 59 回日本栄養・食糧学会抄録(2005 年)

「TV の健康情報番組の視聴と食に関する意識～特定保健用食品の利用状況等を含めて～」

高橋久仁子(群馬大学教育学部)、原田智子(群馬大学教育学部)

(4) 財団法人放送文化基金 平成 13 年度「研究報告」

「医療に関連したテレビ放送番組に対する医療関係者の認識について - 情報娯楽番組に関する医師意識調査 - 」

代表研究者 別府文隆（東京大学大学院生 博士課程）

共同研究者 木内貴弘（東京大学医学部教授）

調査結果（抜粋）

- ・ 情報娯楽番組中の医療・健康情報について、「不正確な情報伝達の印象」を持っている医師は全体の 77.7%
- ・ 情報娯楽番組中の医療・健康情報について、「誇張した表現をしている印象」を持っている医師は全体の 97.1%
- ・ 番組中に明らかな間違いを発見したことがある医師は全体の 44.9%（内容としては、単純な用語・概念の誤用が数多く挙げられていた。）
- ・ テレビの情報娯楽番組において医療・健康情報が伝達される内容については約 61%の対象者が内容の正確さや妥当性の点で何らかの不満を持っていたが、不満度や属性に偏りなく約 86%の対象者がテレビを通じて広く情報提供がなされることの有用性を認めていた。
- ・ 約 78%の対象者が正確な情報伝達のためのなんらかの対策（第三者評価）を必要と考えている。
- ・ 一般市民への影響力を考慮するとマスメディアを通じた医療・健康情報の正確性妥当性をより向上させるための対策の検討が今後必要である。

（５） 財団法人放送文化基金 平成 11 年度「研究報告」

「マスメディアにみる専門家の科学的知」

代表研究者 柄本三代子（千葉商科大学等非常勤講師）

調査結果（抜粋）

- ・ 番組の見方や注目する点はかなりの程度視聴者に委ねられている。
- ・ 健康情報番組がなぜ飽きられることなく人気を博しているのか。健康を害するリスクという脅威に動機付けられ、マスメディアや専門的知によって煽動されている素人という側面だけではこれを説明できない。視聴者は自分たちの知のテリトリーに入ってきたものは、たとえ難解な科学的知に基づいていようと勝手にアレンジして使い分けてしまう。
- ・ 科学的知の裏づけがあれば、なおさら健康であるための日常実践はより楽しみをとまなうものとなる。

(6) 健康の語られ方 青弓社 2002 柄本三代子著

「第3章 ワイドショーにおける健康の科学的リアリズム」

- ・ 人々は確かに、専門的な科学的知にもとづいたリスク提示に高い関心を持つという意味で「健康主義に侵されている」かもしれない。しかしそれは、リスクをおそれてそうしているだけではなく、楽しみの実践にもなっている。
- ・ 健康に関してマスメディアが提示するメッセージやイメージはいかなるもので、それらが健康に関する人々の信念や行為にいかにインパクト与えるかという問題の提起は、能動的であり対抗的な読みをも果たすマスメディアの受け手たち、つまり素人の健康観と実践の方法にまなざしをシフトしていくことを前提としなければならない。
- ・ ワイドショーあるいはバラエティー番組というきわめて大衆的な場で語られる健康と専門家の言説は、専門的知をフルに活用しながらも、人々に実践させる段になると、結局はきわめて日常的な作法とならざるを得ない。(中略)科学の衣をまもってはいても、日常理解の射程範囲にあるモノや行動について専門家たちが指示するのである。それゆえに科学的言説を生活経験のなかに根付かせ、しかも楽しんで使い分けるきっかけにつながっている。
- ・ 科学的根拠は肩書付きの(あるいは白衣着用の)専門家が登場することそれ自体で十分である(中略)登場してくる専門家らは言明を避けることが可能であり、しかもその権威は安易に保たれる。専門的知のもつ権威性は保持されたまま「分かりやすさ」「言明」「身近さ」は、マスメディアのつくり手、媒介者(司会者)、ゲストといった素人が代弁する。そして、専門家らにあえて多くを語らせず、言明を避けさせても、「ありふれたものごとくに隠された健康効果とリスクについて、科学的に説明がなされた」という解釈は可能なのである。
- ・ 数々の驚異的なリスクが提示され、難解な用語が説明不十分なまま続々と登場してきても、それらの科学的知が総動員された日常知によって素人たちの手中に収まれば、勝手に解釈され取捨選択され実施されるのである。

(7) 食べ物とがん予防 文藝春秋 2002 坪野吉孝著

「第1部 はんらんする健康情報を見分けるには」

- ・ 報道はなんらかの研究やデータがもとになっているのがふつうです。けれどもその中には、信頼性や重要性が高いものも、そうでないものもあります。
- ・ 「健康ブームの世相を反映して、健康情報がはんらんしている」などと言われます。流通量についてだけ見れば、確かに大量の情報が出回っています。けれども、その質に注意して見ると、信頼性や重要性が高い情報は、意外なほど少ない(中略)「はんらん」しているのは、じつは信頼性の低い健康情報